

75

KOKUYO

NOTE BOOK

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP



太平洋戦争

六一三

伊藤 慎一



A1501325

目次

一、動機	-2-
二、まとめ	-3-
三、開戦前の外交	-6-
◦ 中ソ条約	6P
◦ 日米会談	7P
四、南方への進出	-10-
◦ 独ソ開戦と日本	10P
◦ 日本南洋印へ進駐	12P
五、開戦の決意	-13-
◦ 東条英機が首相となる	13P
◦ 開戦前夜	
六、太平洋戦争に突入	-16-
◦ 米英と開戦	16P
◦ 真珠湾攻撃	19P
◦ マレー沖海戦	20P
◦ 香港占領	24P
◦ シンガポール攻略	25P
◦ 蘭印の攻略	26P

動機目次

七、敗戦のまじしをやるつもりだ、-27- すが
あまりにも果敢が大きいので、何をやる
よ、で、東京初空襲 27P 太平洋戦争に
興味を持つミッドウェー海戦に大敗 29P の気持で戦争
に関、ガダルカナル島の死闘 30P 太平洋戦争として研究してみようと思いました

八、太平洋戦争終わる -31-

。日本の降状 31P~33P

動機

初めは、日本国憲法をやるつもりだ、たん
ですが、あまりにも果敢が大きいので、何を
やるうかとまよっている時、社会の本を見ていた
ら、太平洋戦争に興味を持ってきて、戦争の初
まった理由、ようす、人物などを調べてみよう
と思い、題を太平洋戦争にして、くわしく研
究してみようと思いました。

太平洋戦争

まとめ

十一月八日米英と開戦、真珠湾攻撃、マレー沖海戦、マレー
沖海戦、マレー半島上陸などに大戦果をあげた日本は、
東南アジア全土にむかって、すさまじい勢いで進撃をつづ
けました。

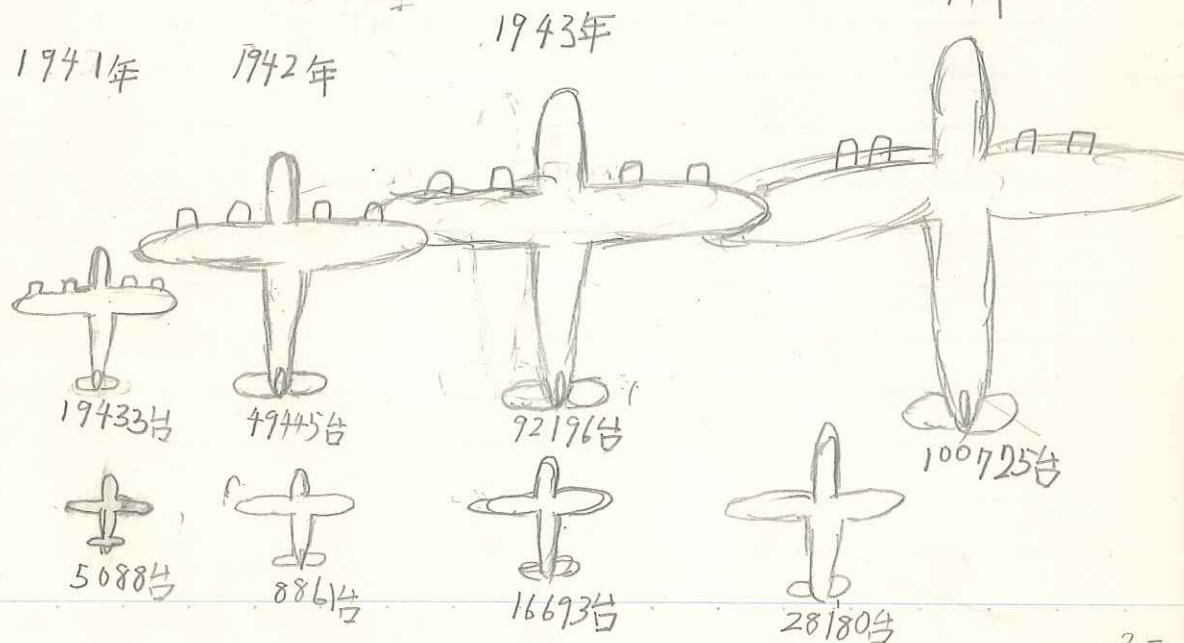
一九四二年(昭和十七年)には、マニラ、シンガポール、ジャワ、ラン
グーンを占領、開戦五か月にして、広い南方地域を手にいれ
ました。

しかし、六月にはミッドウェー海戦に大敗し、一九四三年(昭和十八年)、
米軍の反撃がはじまり、ガダルカナル島をうしな、て、いろいろ、サイパン、
レイテ、マニラ、硫黄島を占領され、一九四五年(昭和二十年)四月には、
沖縄が占領され、本土空襲もつづき、一億玉砕、本土決戦をさけぶ
うちに、八月に、広島・長崎に原爆がおとされ、日本の運命は、もはや、
絶対絶命となりました。

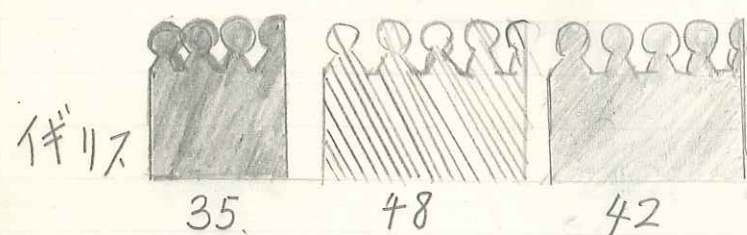
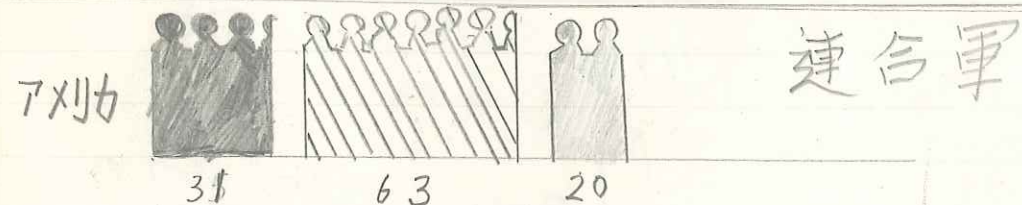
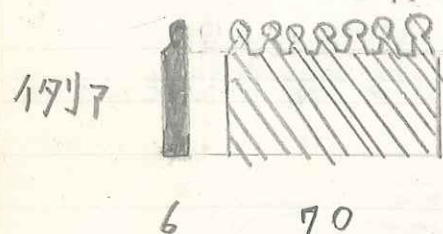
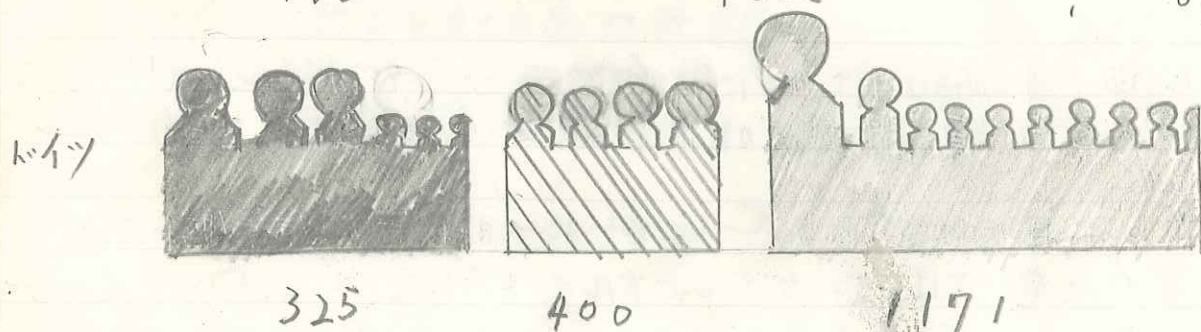
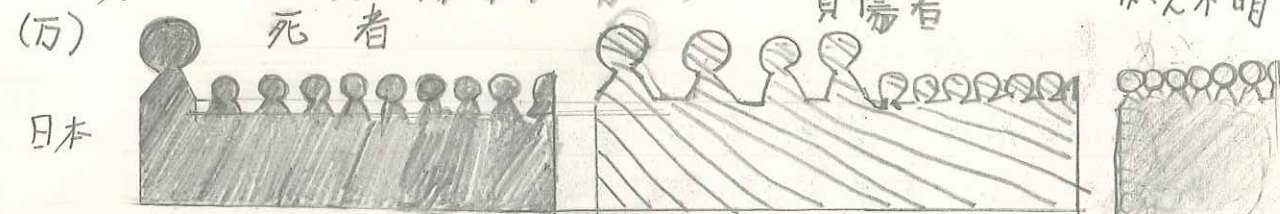
日本とアメリカの飛行機生産し5倍

日本とアメリカの飛行機生産し5倍

1944年

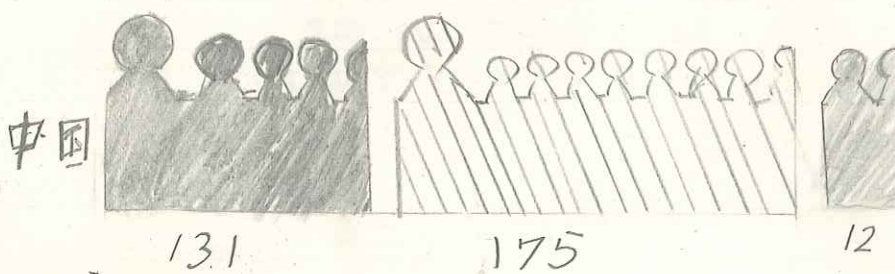
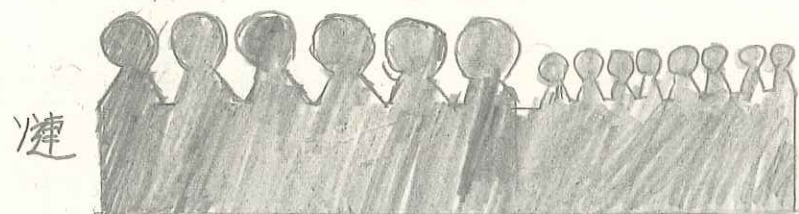


第二次世界大戦の死者の数

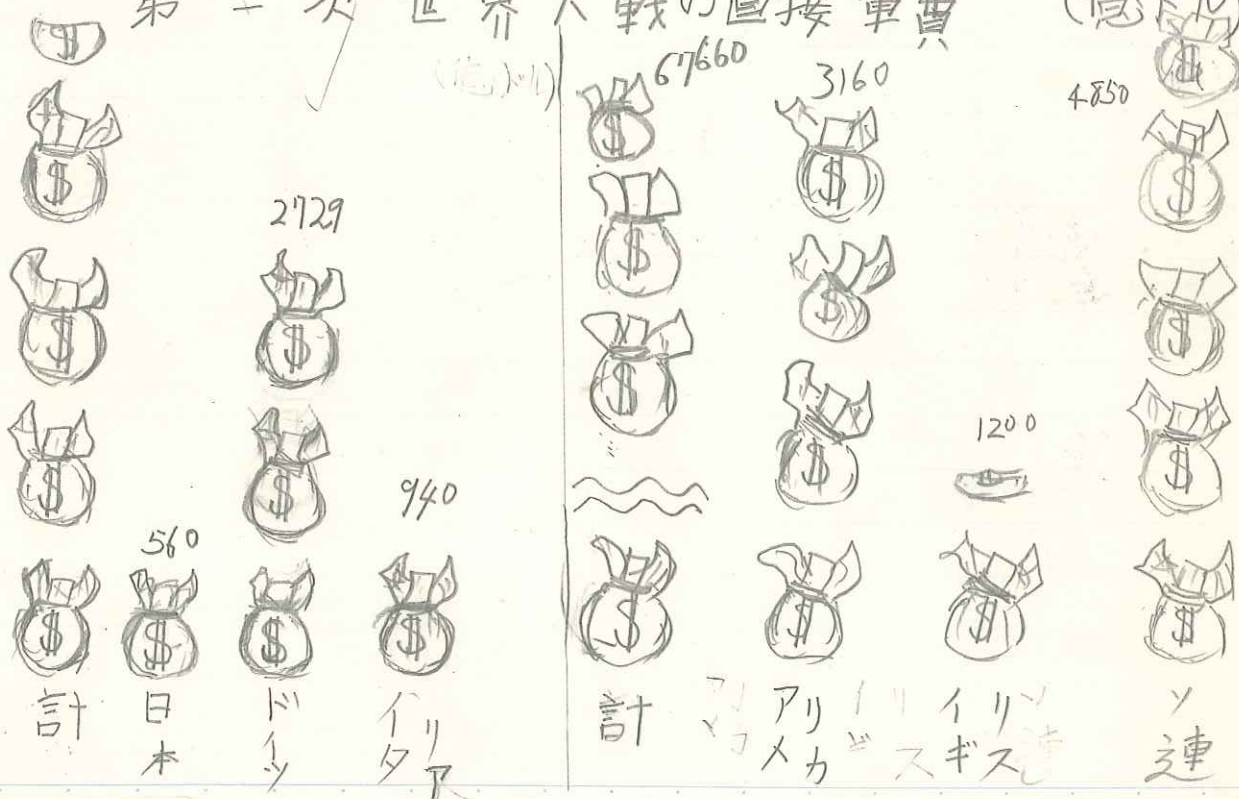


死者

連合軍



第二次世界大戦の直接軍費 (億ドル)



開戦前の外交

日ソ中立条約

一九四一年(昭和十六年)三月、第二次内閣近衛内閣の外務大臣の松岡洋右がヨーロッパへ旅立ちました。

松岡は日本の力が弱く、と思われたがアメリカが戦いをしむけてくるにちがいない。アメリカに手をひかせるにはどうしても、ドイツやイタリアばかりでなく、ソビエトとも手をむすんでおく必要があると考えました。

松岡はヒットラーと会談して、日独伊三国同盟をかため、その帰途モスクワに立ちよりました。そこでソビエトの指導者スターリンと会って、日ソ中立条約をむすび四月の末に帰国しました。

「このころの人たちはなんて考えが深いんだろう。だが、この下にもまたなにか考えがあるのではないうるだろう。それから日独伊三国同盟と日ソ中立条約や松岡さんやヒットラーをもとくわしくしろうと思えた」

この日ソ中立条約はほんとうはつぎのようなねらいを持っていたのです。日本は北方をひとまず安全にしておいて、南方へ軍を進め、さらにドイツとソビエトが開戦したら(このころ、ソビエトとドイツは関係は悪かった)日独伊三国同盟の約束にしたがって、たまたまにソビエトのうしろをついて、これと戦おうという計画だったのです。

日独三国軍事同盟

一九四〇年(昭和十五年)九月日本・ドイツ・イタリアの3国のあいだでむすばれた軍事同盟です。この条約によつて日本・ドイツ・イタリアの3国は相互にヨーロッパ・東アジアの指導的地位にあることを認め、3国いづれか他の国の攻撃を受けた場合、政治経済軍事

のあらゆる面で助けあうことなどが決められました。

日ソ中立条約

一九四一年(昭和十六年)四月モスクワで日本とソ連のあいだで結ばれた中立条約です。日華事変以後、日本とアメリカイギリスとの対立ははげしくなり、日本は満州や北方地域の領土の安全をたもつ必要があり、ソ連も、東南アジアの国境を安全にしておかなければならなかった。この中立条約が結ばれました。おもな内容は日ソ両国は友好関係をたもち、おたがいに領土をおかす、他の国と戦争がはじまるときは中立の立場をとることなどがきめられました。

ヒットラー

ドイツでは第一次大戦後物資が不足してひどいインフレになりました。そのうえ不景気におそわれたので、国民の生活はひじょうにみじめなものでした。そんな時、ヒットラーはナチス党をひきいて、たくみな演説でドイツ民族のすぐれていることをと、独裁政治のしくみをととのえました。

ヒットラーは一九三三年首相になり、よく年総統となり、軍国主義の政治をおし進めて、つぎつぎと領土を占め、一九三九年ついに第二次世界大戦をおこしました。

しかし最後にはアメリカなどの連合軍にやがれ一九四五年、首都ベルリンが占められたとき、自殺しました。

日米会談

一九四十年九月日独三国同盟が成立すると、日本とアメリカの対立は、いさう深くなりました。アメリカ政府はこの三国同盟に対抗してイギリスとともに中国を助けることを明らかにしました。そして、日本へくず鉄を輸出することを禁止しました。

そして、アメリカ、イギリスは中国に多くの金をかりつけました。中国一ビルマ公路も再開され、政府を助けるために、いろいろな重要物資をおくりこみました。

三国同盟が成立すると、日本とアメリカの対立は、深くなたがどのようなことになっていたか。

一九四一年一月ころから、日米両国の民間人などをたてた非公式の交渉がひそかにはじめられました。

はじめはアメリカ側の態度がわりありおたやかだったので、政府はこれを足がかりにして、交渉をすすめようと、里予村吉三郎大將を大使として、アメリカに、おくり、ハル國務長官と話し合いをとせました。

いったいどのような話し合いをしたかそれで、政府はどのような動きをみせたのだろうか。

いちばん初めの日本の申し出しは、次のようなものでした。

- ① 日本軍を中国から、ひきあげる。そのかわり、
- ② アメリカは中国と日本の中をとりもつこと。
- ③ 満州国を独立国として、みとめること。
- ④ 日本と中国は、いっしょに共産主義をふせき、経済の力をたずねること。
- ⑤ 日本とアメリカは昔のような通商をし合うこと。

⑥ 日本に信用貸しをすること。

⑦ 日本が東南アジアの資源を多くに入れるのに協力すること。

この申しでにアメリカはどのような返事をしたか、しるべきだと思つた。

この申しでにたいして、ハル國務長官は、はるしい、アメリカは満州国をみとめましょ。そのかわり、日本は中国から軍隊をひきあげ、中国の土地をとらなかりで、いさ、賠償金をとらないようにしなさい。ともわりのいい返事をおくってきました。

近衛内閣は交渉をこのあたりでまとめようと考え、松岡外相の帰国をまてりました。帰国した松岡は、この交渉はドイツやイタリアにそむくものであり、外相たる自分のるす中に、こんな交渉をするのは、けしからんといひ、強く反対しました。

松岡外相は中国からは日本の軍隊をひきあげることとは、でまな、日本の中国における政略をみとめて、蒋介石に和平をすすめるべし、といへん、強、こうな回答をアメリカにつまづきました。

この結果「松岡外相のいる近衛内閣とは話したくない。満州国を承認してもよい、だがそれはとり、強、強い態度にかりせ、うま、ま、りかけた、日米交渉は流れてしまいました。

松岡外相はなんという失態をたんだらうと思つた。アメリカに、たて、ついては、し、ても、かなうはずがないのに、と思つて松岡外相が、た、く、な、つてきた。

南方への進出

独ソ開戦と日本

日米交渉がゆきずま、たころ、一九四一年(昭和十六年)六月ニナニ日、とフゼン、ドイツはソビエトとの、不可侵条約、をやぶり四百万人に、のぼる軍隊がソビエトに、ど、と攻めこみました。

これはフランス、イギリス、方面の戦局がゆきづまり、国民たちの間に高ま、てきた、不安をのぞき、これによ、て、懸念、なかなかり、しよ、としてやたのです。

ヒットラーは六週間でソビエトを占領するといいました。

その日のうちに、イギリスの首相チャーチルは、はげしい、反共主義者ですが、ドイツがソビエトにたやすく、勝つようなことが、あ、てはイギリスも、とうてい、ドイツに対抗できなくなることを、おそれて、いました。

それにまた、ソビエトをたすけることによ、て、ドイツとソビエト、がともたおれになることを期待して、いました。

イギリス政府に、ニ日おくれ、て、アメリカ政府もまたソビエトを、助けることを、声、明、しました。

この戦いは、だんだんドイツがおされ、ぎみになる、だ、らう、この戦い、日本は、どのような、たいど、を、も、た、た、らう、か、

さ、て、独ソ開戦に対して、日本は、どのように、対、処、した、で、し、ょう、か、

松岡外相は参謀本部とともにドイツに、あ、じ、て、ただちにソビエトを攻撃すべきであると強く主張、しました、かれらはドイツが絶対に勝つと信じていたのです。

しかし、陸軍や近衛首相はこれに賛成、し、ま、せ、ん、で、した、ソビエトは、そんなにかんたんには、ま、い、ら、な、い、だ、らう、し、ノモンハン事件の時には、日本はソビエトに、ひ、ど、い、目、に、あ、わ、た、れた、経、験、が、あ、り、ま、す、ソビエトと戦う準備は、また、不、十、分、で、し、た、

七月二日の御前会議で、三国同盟の精神を守るが、すぐにはソビエトと戦わないで、十分武力をこのつえ、独ソ戦が日本に有利にな、た、時、に、ソビエトをうつことに、し、て、ま、ず、北の方を安定し、南方への進出を先にしよう、という、こ、と、が、ま、り、ま、した、

この方針にしたが、て、陸軍は、大動員を、お、こ、な、い、関東軍の兵力を、これまでの約二倍の、七、十、万、に、ふ、や、し、戦車と航空機の大部分を、満州に、あ、つ、め、ま、した、

日本は、大軍の圧力で、戦わずに、ソビエトから利権や領土がとれると期待、した、ので、う、ち、に、い、ろ、い、ろ、な、要、求、す、る、こ、と、を、き、め、ま、し、た、が、ソビエトがドイツ軍を、く、い、と、め、て、戦、た、ので、それ、を、だ、す、機、会、が、な、く、な、り、ま、した、

せ、か、く、あ、つ、め、た、の、に、機、会、が、な、く、て、は、し、か、た、が、な、い、で、も、こ、れ、は、日、本、の、作、戦、が、わ、る、か、た、と、思、え、

日本南仏印へ進駐

ソビエトとの戦いを待つことを決めた。同じ七月二日の御前会議で、政府と軍部は、南仏印とタイに、軍隊を進駐させ、南方へ進出するかまをいって、そう強め、このためには「イギリスやアメリカと戦争になってもやむをえない」ということを決めました。

これは日本が西南太平洋に武力で進出するための基地を作るものだということ、アメリカをはじめ、全世界の目には、きりうつりました。

こんなことをして、アメリカやイギリスは日本に、どんな態度をとるだろうか、またアメリカのとった態度は、どんな、ひがいを日本にさせたのだろうか。

近衛首相は、アメリカとの交渉をうまくまとめようと考え、松岡外相をやめさせるために、七月十六日に、総辞職をし、第三次近衛内閣をつくりました。

政府は対米交渉をつづけましたが、アメリカの態度は日ましに強くなり、仏印を中立にしようとし入れました。日本はこれを、はねつけ、七月二十四日、仏印に「共同防衛協定」をおしつけ、南部仏印に日本軍の進駐をみこみさせました。

米英は、これに反対し、二十五日に、イギリスは、日本とイギリス本国、インド・ビルマとの間にむすんだ条約をとりつけ、二十六日には、米英兩國はその領土内に、ある日本人の資産を、とけつしました。

二十八日、日本軍は、南仏印に進駐しました。その日、仏印（オランダ領土東インド＝今のインドネシア）も日本人の資産を、とけつし、石油協定をやり、アメリカも、日本に、石油を輸出することを禁止しました。

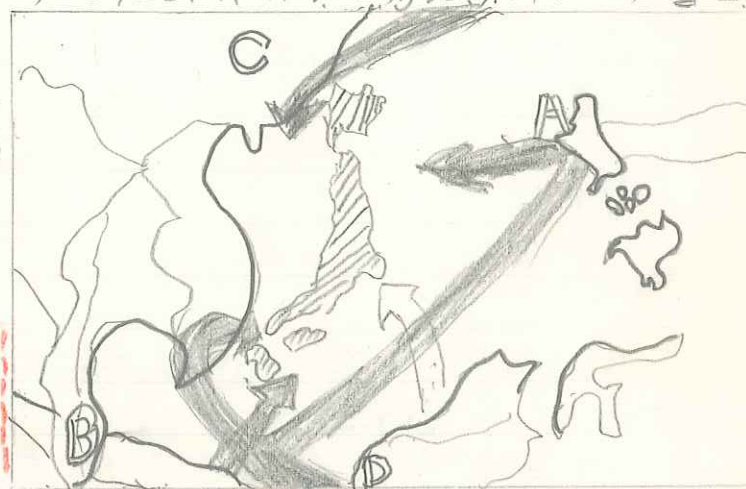
開戦の決意

東条英機が首相となる

政府は国民に、アメリカ（America）イギリス（Britain）中国（China）オランダ（Dutch）の頭文字をとって、ABCD陣が日本をかこみ、しめ殺そうとしていると、大きく宣伝し、国民がアメリカやイギリスに敵意をいだかせるように、つとめました。

国民は、また、じりじりと首をしめられるような重苦しい、気分を、早くはねかえすにはどうしたら、いいかと考え、米英らの国と、

おもひき、つて、戦ったほうがいいかと考えるようになりました。新聞や雑誌にも、そういう意見が多くて、なりました。



近衛首相は、いったい、この時、どんなことをしたのだろうか、また、いよいよ、アメリカと戦うのだろうか。

近衛首相は、自分で直接ルーズベルト大統領と会見し、なんとか局面を打開しようとしたが、会見にいくためには、南方へ武力をもつて進出しなさい、という、決断した返事を、もつていかねばなりません。しかし、そんなものは、ありませんでした。アメリカは、この申しでをうけいれませんでした。

一九四一年（昭和十六年）九月六日の御前会議で、十月五日になっても、日米会談がまとまる見込みのなかり時は、ただちに、アメリカ・イギリス・オランダとの開戦を決意する、ということがまじりました。

十月になりましたが、日米交渉がまとまる見込みは、ぜんぜんたちませんでした。

陸軍大臣の東条英機は「これ以上、会談をつづけてもむだだ。先の御前会議の決定にしたがって、開戦を決意しよう」と強く主張しました。

もし、ぼくが首相だったら、話し合いて、英米との戦いを、さけるだろう。南方への進出ぐらゐやめたら、いいじゃないか。

近衛首相はなお交渉をつづけることを主張しましたが東条陸相は聞きません。

近衛首相はついに天皇に、東条陸相と意見が対立した実争をのべ、開戦をおさえることができないのを理由に、辞表をだしました。

天皇は内大臣木戸幸一の助言をきいて、ただちに東条英機を首相に任命しました。

木戸は陸軍をおさえることのできるものは東条のほか
にない。東条も首相として責任のある地位につけば
開戦にも慎重になるだろうと期待していたとい
うことです。

東条首相は陸相と内相も兼ねました

「広く検討し、慎重に考え、しるべきように、」という天皇の
さしずをうけ、たびたび会議をかこねて、はげしく
意見をたたかわせました。そして、十一月五日の御前会議
で、対米交渉をつづけながら、武力発動の時機を十
月の初めと決め、作戦準備をすること。対米交渉が十二
日一日午前の時まで成功すれば、武力を発動せしめ、
ということを決めました。

この方針にしたがって、陸軍はただちに作戦の準備にかかりました。一方、野村大使の応接に東郷大使をアメリカにおくり、交渉をつづけさせました。

開戰前夜

アメリカは来領大使の派けんについて、
①日本は全力をつくして、アメリカをよきかせよとしており、
②もしそれ失敗したらアメリカを攻撃する準備ができる
まで、日米会談をひきのばすだろうとみてとりました。

十一月二十日、野村・来栖大使は

①日本は仏印以外の東南アジアや南太平洋方面には進撃しないこと。

② 日本通商を本年七月日本の財産凍結以前のありさまにか
えすこと

③ アメリカは日本と中国の和平をじゃましないこと。

の三点を申し出たとする。二十六日、アメリカはこれをけつてすべて満州事変の前のようすにかえれ、という強い回答をよこしました。この回答は日本は最後の通牒だ、というけつたのです。

この日千島にあつまっていた日本の艦隊は、ハワイにむかって発進していました。

十二月一日の御前会議で、正武に、日本とアメリカイギリス・オランダと開戦することに決まりました。七日午後二時二十分(アメリカ時間)日本政府は、日米交渉をうちきり、アメリカに通告しました。

とうとうアメリカと戦うことになったが、このとき国民は
どんな気持ちだったろうか、ぼくのようでは、さ、さ、さもち
か暗かったとさえ

太平洋戦争に突入

米英と開戦

“大本営陸海軍部発表 帝國陸海軍は本日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり、

一九四一年(昭和十六年)十二月八日の朝六時すぎ、ラジオからとつぜん、国家“君が代”がながれ、臨時ニュースが流れたえられました。

真珠湾攻撃のめざましい戦果につづいて、正午には天皇の宣戦の詔書が放送されました。

じ、さい、この朝の国民の持ちはんともいいようのないものでした。

どこまでもつづくぬかるみをあてどもなくまよいつづけてきたような日華事変にあきていた国民にとって、アメリカやイギリスのいろいろな圧迫やいやがらせは、しだいに、日本をじりじりとしめこうりょうにも思われていたやさき、けつ然この二大国に戦いをいどみしかもり、はな戦果をかかげたのですから、多くの国民は胸がすくおるような思いをいたしました。

一度、うばな戦果をあげてもうなう点にな、てはだめだと思ふ。
アメリカやイギリスはいつかはきっと日本を占領すると思ふ。

しかし、一方には中国であるだけ軍隊とたくさんの軍費や資材をつかったのに、さらに大きな国と戦いをはじめて、はたしていいものだろうか、という大きな心配がありました。でも真相をしらない多くの国民は政府や軍部がよほどの自信をもて開戦したにちがいないと思い、戦勝のしらせによ、不安をわすれていました。

実のところ、太平洋戦争は軍人にも政治家にも、だれにも自信のない、また見通しのない戦争だったのです。第一開戦の年の日本の経済力はアメリカの十分の一もあり

ませんでした。

いくら、日本が強くても、経済力がアメリカの十分の一もなければ、
やあかなうはずがない、と思ふた。

国際情勢においても、日本には不利なことが多く、アメリカには有利なことばかりでした。日本がたのみとしたドイツは、ソビエトにか、ちりくいとめられ逆に反撃されていましたが、日本はこれをたすけることはできませんでした。

日本は、中国大陸で五億の中国民族を敵として、満州事変以来十年日華事変にな、へから四年たち、日本の陸軍の七割は中国にくぎづけにされていました。

このように、国力をつかいはたしている時、新しく英米を相手にして戦争をはじめるなどとは、思ひもよらないことでした。

海軍はことに自信がありませんでした。

連合艦隊司令長官山本五十六大將はアメリカの實力を十分しっていました。

「みんなが考えているほど、アメリカはあまくない。できれば、戦争はしないほうがいい。もし戦うとしても、長い戦いになればかならず農かな国をもつアメリカに、日本は負けてしまうだろう」

という海軍は開戦二か年の間は勝つ自信があるが三年め以こうはわからないと開戦をいがっていました。

なぜ自信がないのに開戦したのだらう、自分の頭で
いくら考えても、わからない。開戦したのはなぜかしらべ
てみよう。

では、いたい、自信のないのに、どうして開戦にかみきったのでしょうか

それは指導者となった政治家や軍人たちが日本および世界について深く研究せずし、かりした見通しももたずに戦いをはじめたことによります。

さらには日本が昭和の初めにおちいた金ゆうきようこうからぬけだそうとして、満州事変をおこして以来、中国民族を相手として長い戦争をつづけ、その解決のめどをつかむことができず、ますます危機にはまりこんでいったことによります。

中国との戦争をやめることによつて、この危機をぬけだすことができたのですがそれをなした偉大な政治家、愛国者はあらわれず、完全に戦争の体制になつて、いた国の仕組みを元へもどすことができず、結局は戦争をよりひろげることになってしまったのです。こうして、国家と民族をはめつにみちひく道にうますすんでしまったのです。

開戦の理由を、おどろいた。だがこれから日本は、どんな動をもみせるだろう。

真珠湾攻撃

十二月二日午後五時三十分、山本五十六連合艦隊司令長官からすでに北緯四十度、西経百七十五度付近をハワイに向かつてすすむ南雲忠一中将のひきいる機動部隊に命令が発せられました。

「ニイタカヤマノボレニオハ」

これは「十二月八日午前〇時を期して開戦」の命令だったのです。

十二月七日朝六時、航空母艦からつぎつぎにとび出した三百五十機は、午前七時五十五分から九時四十五分まで

真珠湾内にいた、艦船をはじめ、オアフ島にある飛行場を大空襲しました。

この日は日曜日であつたので、アメリカ海軍や空軍の兵たちは休みをとつて上陸している者が多く、また、たぐの不意をつき、オクラホマを始めとする艦船をうちしめ、航空機などに大損害をおとしました。

日本軍の真珠湾攻撃は、日本にとつては、よきことに大セリウでした。

この知らせはきつと日本の重苦しい空もちをうきまはしただろう。しかし、これで戦いが終つたばかりではないのだ、はは、たばかりだ。



マレー(マラヤ)沖海戦

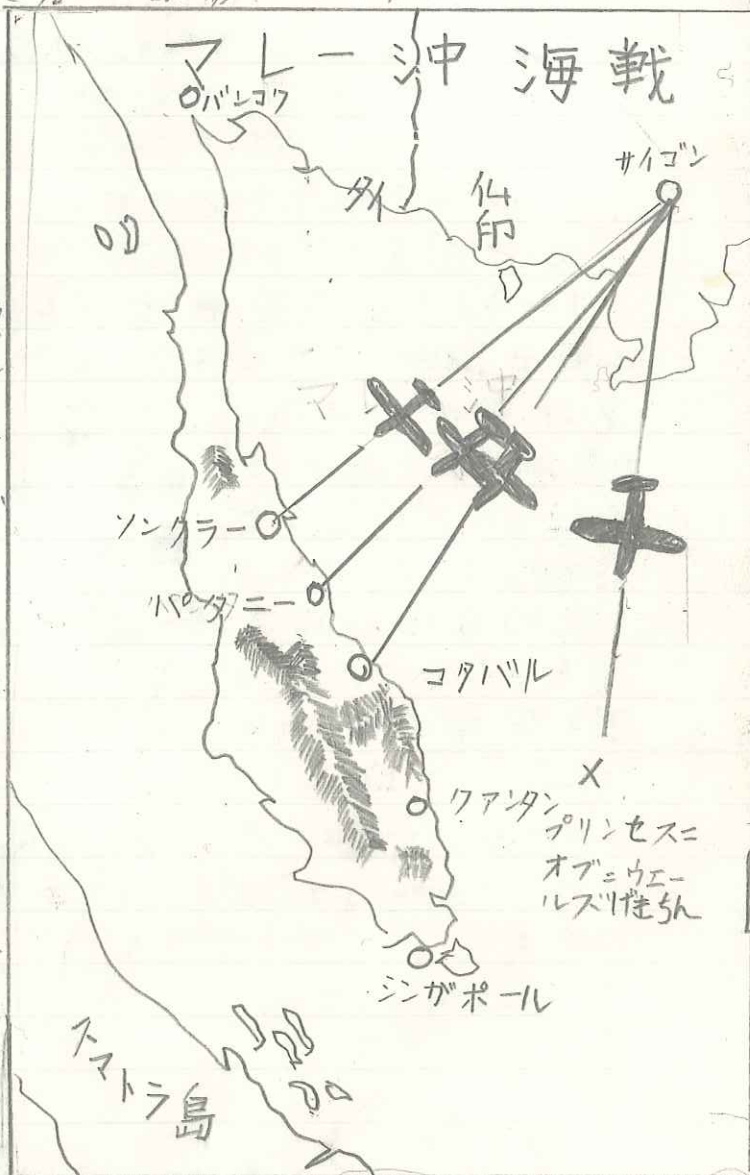
真珠湾でアメリカ太平洋艦隊に大きな損害をあたえたことは、日本軍の南方攻略を容易にしました。

この南方攻略の計画はまことに雄大なもので、イギリス領の香港・マレー半島・ボルネオ・ビルマ、アメリカ領のフィリピン、オランダ領のジャワ・スマトラ・ボルネオ・セレベス島などはじめ、アメリカ領のグアム島やウエーク島などをせめ取るものでした。

なかでもシンガポールの占領は、真珠湾の攻撃とならんで、もっとも重要な作戦でした。

十二月八日、午前四時四十五分より行動をはじめた山下と文中将のひきいる日本軍は、海軍の助けをえて、マレー半島のコタバル・ソングラー・パターニーなどに敵前上陸しました。

コタバルではイギリス兵やインド兵の抵抗にあり、げき戦の後、上陸に成功し、近くの飛行場も占領しました。このコタバル上陸は、真珠湾より先で、太平洋戦争最初の



戦闘だったのです。

コタバルの上陸が真珠湾攻撃より先だとはおどろいた。ではコタバル上陸は開戦より先だ、たがもしれない。それにまた戦いが続いていくんだから、さてもう11戦果をあけただろう。

つづいて、日本空軍はマレー半島にある各地の飛行場を空襲し、開戦第一日に、英国極東軍をほとんど撃滅しました。また不意をついてシンガポール市内の空襲しました。

さらに十二月十日午前十時十五分、マレー半島クアランタン東方の洋上で、イギリス東洋艦隊をとらえた雷撃隊は、敵のはげしい対空砲火をあびながら、魚雷攻撃をし一時間後には、戦艦クレイパルス、三時間後には、不沈戦艦といはれたプリンセス=オブ=ウェールズをしずめました。真珠湾とマレー沖海戦の大戦果は世界につたえられ、日本軍のゆづかん士が、どろきあたりました。

いくら戦いに勝ってもたくさんの方が死んでいくんだ勝ててもむづかしいと敗けるんだ勝てても早くやめればそれだけ多くの人がたずかるんだから早くせんそうをめめばいいのは

フィリピン空襲・ウェーク島占領

フィリピンの攻撃は台湾からとびつた飛行機による爆撃で開始されました。

十二月八日の早朝より十三日までの間に「クラークフィールド」「イバ」などの飛行場を数回にわたって空襲し、フィリピンにいるアメリカ空軍をほとんど撃滅しました。

ウェーク島とグアム島はともに小さな島ですが、アメリカ本土とフィリピンをむすぶ航空路の中継地点として、西太平洋における重要な基地でした。

グアム島は十日十日、陸軍と海軍陸戦隊が敵の抵抗をほとんどうけることなく上陸して、これを占領しました。

ところがウェーク島の攻略はたいへんでした。八日、開戦と同時に三日間つづけて島を攻撃し、敵の飛行機・飛行場・砲台を十分破壊しました。

それで、もうだいたいじょうぶだと思って、十日午前二時に上陸しようとした。ところが、暗なうえ高波にもまれて上陸できませんでした。

そこで一たんいそいで明け方、艦砲射撃をしてから上陸しようとした。ところがそのとたん敵の三砲台がい、せいに火をふき、のこった敵の四機がまいってわがくちく艦隊におそいかかりました。

もう一歩というときに、失敗したりは少しゆだんがあったからだと思った。ふとゆだんしたただけでも何千人としないでいくんだ。だから、作戦をたてるにはもっとぬんみつにたててほしいと思う。これからいったいどのような手を使って上陸するだろうか。

このため、駆逐艦二隻がしづめられ、駆逐艦二隻と輸送船一隻を破壊され、上陸ははばまれ、日本海軍は開戦以来はじめての大失敗をしました。

応援に駆けつけた日本の艦隊の助けをえて、夜のうちに上陸し、漸戦の後、米兵をくたして三日の明け方、島を占領しました。

この島を大鳥島と知づけました。

香港占領

十二月八日午前三時、日本軍マレー上陸の知らせを受けた。香港攻略部隊は、ただちに行動をおこし、国境をこえて軍の防線線を突破しました。そして二回も香港の英軍に降伏を進めました。英軍はこれをこばみましたが、十八日、砲撃を再開し、この日の午後九時にスコールの中を、香港東部に上陸しました。

香港北東部の山岳地帯を占領した日本軍は、ここに砲撃をし、英軍陣地や市街をエカンに砲撃し、空軍の空襲をつづけました。そして十二月二十五日のクリスマスの日、攻撃以来、あづか十八日めに、英国を降伏させ、香港を完全に占領しました。

国を愛する気持ち、は米軍も同じなんだなと思つて、こつかくした人を、ていねいにもてなしてやつてくれたらうかと心配だった。

シンガポール攻略

マレー半島に上陸した山下中将のひきいる陸軍は二月十一日を期してシンガポールをせめおこそうと、南にむかひ、快進撃をつづけました。

ここに自転車師の銀輪部隊・工兵隊・戦車隊の活やくはめがまし、各師団は東洋における米国の本拠、シンガポールをめざして一番乗りをあらそいました。

コタバル上陸以来、退却する敵を追ひまゝ、一月三十一日午後二時、ジョホールバルに突入、その行程約四百キロを五十五日で突破しました。一日平均約二十キロの進撃で、その間、戦闘九十六回、約三万五千の兵力で約八万の英軍をせめやがり、日本陸軍の突撃をしめしました。

日本の陸軍が倍以上の人数を相手にして、せめやがり、たりにちどろいた、これは範圍心が強かたかぶだともいえると思つた。

ジョホール水道北岸にあつた日本軍は二月七日に一部が、北東部に上陸。八日夜に約三百発の砲撃の後、主カが北西部に上陸。大激戦の後、二月十五日午後四時ブキテマ高地を占領、この夜山下・パーシバル両将軍の会見があつた。シンガポールはついに占領されました。

蘭印の攻略

シンガポールを占領した日本軍は、開戦の目標でもあった蘭印（オランダ領東インド＝今のインドネシア）の石油を手に入れるため、この方面の攻略にとりかかりました。

一九四二年（昭和十七年）二月十四、五日に日本陸軍最初の落下兵部隊がスマトラ島のパレンバンに降下しました。降下兵は四百三十名でしたがいずれも勇かな精兵ぞろい、飛行場や精油所を占領しました。つづいて十八日に主カパレンバン市には入り、南部スマトラをおさめました。

ジャワ島攻略に向か、た日本陸軍を護衛した日本艦隊とこれをふせごうとした英・米・蘭・オーストラリアの連合艦隊とが二月二十六日から二十八日にかけてスラバヤ沖とバタビア沖で海戦をおこないました。

ジャワ島に上陸した日本軍は、三方からバンドンをめざして進撃して、連合軍をつぶすかにやがり降伏させ、三月十日には、市民にむかえられて、バンドンに入城しました。

ジャワではこれまでのオランダの支配をにくみ、独立をとり、るインドネシア人たちの協力によって、容易に攻略することができました。インドネシア国民の親しみは戦後もおとろえず、今も友好国となっています。

今まで人を殺したりして来た人たちがインドネシア人のためにいいことをしたということになりインドネシア人のためだし、また自分の気持ちをまたたかくしてくれたと思う。戦争の間には人というに心から親切にしてくれる国があたしはインドネシア人は恩にあひんだな、ーと思った。

敗戦のきざし

東京初空襲

南方作戦が終わると、日本は、ビルマ・タイ・マレー・蘭印・フィリピンその他の東南アジア地域を支配下におこめ、その領域は中部太平洋からニューギニアまで広がりました。

一方アメリカ太平洋艦隊や英・蘭・豪の極東艦隊を海底にしづめた、日本艦隊は大太平洋からインド洋まで勢力下におさめました。

日本の軍部や国民はこれまでの大戦果により国中が戦勝気分にはたっていました。

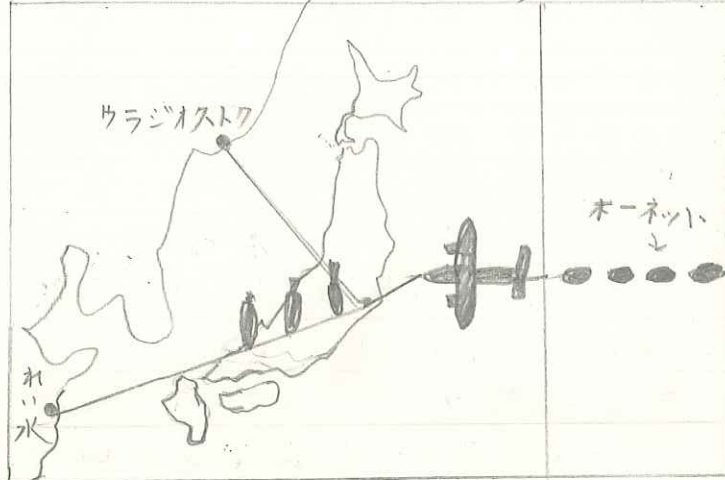
これからどうするかについて、たびたび会議がひらかれたましたが、陸軍は持久戦で英米が自ら戦意をうしなうのを待つ策を主張したのに対し、海軍は、米艦隊との決戦を主張していました。山本連合艦隊司令長官は戦いが長びけば、米艦隊は勢いを回復するだろうし、東京空襲がおこなわれて、国民が不安になるにちがいないから、米艦隊を早いうちに撃滅すべきだと主張しました。

「ぼくも考え、山本五十六と同じだ、アメリカに反撃したら、国民はおびえて戦争に自信をなくしてしまう、かたです。」

一九四二年（昭和十七年）三月ごろから、米機動隊が各地にあがられるようになり、ました。そして、昭和十七年四月十八日午後四時三十分、とうぜんアメリカの艦隊が東京を空襲しました。これは米国の空母クローネットから出た、ドーリットル中佐の指揮するB-25機による空襲で、東京湾のあたりに日本国民を不安にさせることをうらな、ものじした。これらの米機は、東京・川崎・横浜・名古屋・

どを銃爆して、うち一機はウラジオストクへ、他の十五機は

中国大陸へ、着陸しました。日本本土の守りは、かえりももらえず、このえ



ほくは、いつかはこ
うなるだろうと思っ
ていたが、おれにも早すぎた。

ミッドウェー海戦に大敗

一九四二年(昭和十七年)五月五日、ミッドウェーアリュージョン攻略の命令が下されました。連合艦隊は連日、はげしい訓練をして、艦隊決戦にそなえました。

五月二十六日より各艦隊は、それぞれ、ミッドウェーアリュージョンの攻略にむかいました。この作戦に参加した艦隊は、三百五十隻、飛行機千機、将兵約十万人という日本海軍史上、最も大きな出撃でした。

日本連合艦隊司令長官は六万九千トンの戦艦矢矧、に乗り、長門、陸奥、の戦艦をはじめ主力部隊をひきいてミッドウェーを目指して、すすみました。

いったいこれから、どのような戦いが始まるのだろう。
日本軍がこれだけの艦隊をひきいていけば、と
勝てるだろう。

ところが日本側のこの作戦はアメリカに知られていました。

六月五日午前一時四十分、南雲中将のひきいる第一機動部隊の四隻の空母からとび出した百八機の飛行機がミッドウェーの空襲にむかり敵に大きな損害をあたえました。

これらの飛行機が空母に降りついて次の出発の準備にかりかっている所へ、アメリカの三空母から飛び立った百四十六機が一気にあが四空母めがけてあそびかかりました。まったく奇襲の反撃にあつたのです。

アメリカ軍の空母一隻と駆逐艦一隻をすくめただけで、日本軍は海戦に最も重要な空母四隻と重巡洋艦一隻、それに多くの飛行機と飛行士をうしなりました。

この海戦の結果は日本国内にひたかくしにされましたが、この海戦によって、日本と米国の戦力は、すっかり逆になりました。

太平洋戦争終わる

日本の降伏

一九四十四年(昭和十九年)十一月になると日本本土はアメリカ空軍の爆撃を受けるようになりました。これは七月に太平洋上のマリアナ諸島が、アメリカ軍に占領されてしま、たからです。アメリカ空軍はこのマリアナ諸島の基地から日本本土を空襲するようになったのです。こうした戦争の不利の中で、ついに東条内閣は辞職し、小磯内閣となりました。

一九四十五年(昭和二十年)一月になると、フィリピンのルソン島もアメリカ軍に占領されてしまいました。四十万の日本軍は山中でうえと病気のために、ほとんど死に、陸軍も海軍もつきつぎアメリカ軍にやがれていきました。

日本の本土にだんだん米兵がせまってきた。

日本のはめつはもう時間の問題だろう。

三月には小笠原諸島の南端にある硫黄島がとられ、四月にはアメリカの大軍が沖縄本島に上陸し、日本本土の攻撃が一日一日とせま、てきました。

三月ごろからは東京はじめ、日本各地への空襲がはげしくなり、日本の国土は、つきつきと焼け野原にされていきました。敵の飛行機が日本の上空を飛んできて、日の丸をつけた日本の飛行機はほとんどすがたをみせなくなりました。それでも国民はこれを、本土決戦にそなえて、どこかに飛行機をかくして、あるのだと信じ、やがては連合軍をやっつけることができると思いながら、毎日の苦しさにあたえぬいていました。

こうした中で政府の中にも、もう勝つみこみがない

ガダルカナル島の死闘

一九四二年(昭和十七年)六月十六日、日本軍はソロモン諸島のガダルカナル島に兵をおくり、飛行場をつくらせました。これは南進して、オーストラリアをおびやかし、一方、アメリカ軍の北上をおさぐためでした。

これに対し、ニミッツ提督はソロモン諸島へ進撃し、ラバウルをおさえ、そこから日本海軍基地トラック島をたたき、ついで、そこから東京空襲をしようと考えました。

八月七日、アメリカ軍はガダルカナル島にむかって反撃し、上陸して飛行場をとりました。これ以後、ガダルカナル島のうばい合いで、日米両軍の死闘がくりかえされました。

海軍は第一次ソロモン海戦・第二次ソロモン海戦・サボ島沖海戦・南太平洋海戦・第三次ソロモン海戦でしのぎをけずりました。

陸軍はジャングルの中で死闘をおこし、マラリアとうえになやみ、戦死、戦病死で悲しい最後をとげました。

翌年十一月、日本軍はこの島をとりぞめました。日本軍は、たくさんのおとこ、陸海将兵と艦船、飛行機をうしなしました。

ガダルカナル島のうばい合いは、兵士や弾薬などをついやす、大消耗戦だったのです。石油もこのころなくなり、輸送船も不足し、飛行機の生産もおいつかなくなりました。

この敗戦も後になって「転進」ということは「国民に知らされなかったが、これ以後アメリカは本はげしく攻めてきました。

この兵士たちは、なんて、辛い、なんだろう。このな
所で死んでしま、て、しかし、それでも、日本はせん
争をやめようとしないうちだろう。

ことを知り、なんとか和平をしたいという人もでてきました。

五月にドイツが降伏すると、そのころ小磯内閣の後をついだ鈴木内閣は日本もこうなればたいへん、ソビエトにたのんで有利な条件で降伏しようと思いました。しかしソビエトは降伏の仲立ちをしてくれませんでした。

いくらソビエトが親切でも仲立ちなんかしてくれなかつた。う。それに少し日本はむしろ過ぎるしかしアメリカはひどい条件でこんどは和平をもうしてさだうえ、たいどんな条件だろうか。

そうするうちに、ポツダム宣言がだされました。この宣言は受け入れるわけにはいかないと考えた鈴木内閣は、わざわざこの宣言を毛く殺する」という首相の談話を発表し、戦いをつづける決意をしめました。

日本がポツダム宣言を受け入れないとわかると、アメリカは早く日本を降伏せよと考へ、ついに広島に原子爆弾を投下しました。

一九四五年(昭和二十年)八月六日午前八時十五分、一発の原子爆弾が落ちると、あっという間に広島は地獄化し、二十数万の人々が無残にも殺されました。

この原爆により、政府も軍部もすぐに降伏した方がよいという意見が強くなりました。やがて九日、ソビエトはヤルタ協定にしたがって、日本に戦いをせんし、満州の国境をやがて攻めてきました。

この日、アメリカは長崎にも原子爆弾を投下し、十万余人の市民を殺傷しました。

こうなるとはもう降伏するしか道はなくなりました。そしてついにポツダム宣言を受け入れ、連合国に降伏することを通告しました。そして国民には、十五日正午

天皇のポツダム宣言を受け入れるということが放送されここに太平洋戦争もあわりをつけました。

一九四年(昭和十六年)十二月、日本がアメリカ・イギリスと戦って始まった太平洋戦争も、三年八カ月のうち日本の敗北で終わりました。満州事変から数えるとじつに十四年間の長い戦争でしたが、やがて日本に平和がもどてきました。

長い戦いがやがて敗戦で終わったが平和にな、た。い。うてもまだまだ、うまくいかないことが多くてきた。う。しかし、日本人は、一歩一歩前進して今の文化を作ったんだな。ーと思った。

ポツダム宣言

- 一九四五年(昭和二十年)七月、アメリカ・イギリス・ソ連の3国の代表は、ベルリン郊外のポツダムで会合し、戦後のヨーロッパの処理について相談したが、さらにアメリカ・イギリス・中国の名でポツダム宣言を発し、日本に無条件降伏をすすめました。おもな内容は、
- ① 軍国主義をやめさせる
 - ② 日本を占領する
 - ③ 日本の領土は本州 北海道 九州 四国 とその付近の島々
 - ④ 軍隊を解散する
 - ⑤ 戦争犯罪人を罰する
 - ⑥ 民主化をすすめる 基本的人権を尊重する。
- などでした。

太平洋戦争について

東条英機は国のために、せいゝ、ばゝつくした。
でも、米英と開戦したのは失敗だと思つた。これは
敗れたから言うのではない、もともと日本が敗れると決
まっていたから、少しぐらい不利な条件でも、な
るべく、米英との戦いはよけて、ほしいと思つた。それ
から軍人の中にはこれではいけないと思つた人がい
ないなんて、信じられない。ばくでさえ思ふのに、米英と
開戦したのは、東条英機だけりせきにんでなく、国
民にもあると思つた。それから神風特攻隊のように、自
分の命をぜいにして、相手をおそうとした
人をばくはけいべつする。理由は、中には、まともんくの
ある人もいふ。でも、もんくをいふないで命をす
てた人もいふ。もう一つ、自分の国を思ふなら、なせ
早く死のうとしたんだらうか。自分の国を思ふなら、自分
の国の発達を見せようとするのほうか、ばくは
えらうと思ふ。それから、原子はくたんのことだが、なん
て、おそろしい物だと思つた。こんな兵器はもう二度つか
りないようにしてもらいたい、この研究をしてほんとうに
めかつた。